

第一章 ポーシヴが導く劇的な出会い

(1) ドラゴンからのEメール

ほの暗い地下牢で赤銅色のドラゴン、ヴィラーネは落胆の息を漏らしていた。

「またも皇帝ダカルシアの命令どおり、異世界へメッセージを送ってしまったからだ。」

この音を聞きつけたらしく、となりで拘束されている小柄で若く、緑色のワイバーンから弱々しい声が出てきた。

「僕たち、いいや、この世界はもうもたないよ……」

ヴィラーネはかろうじて動かせる四肢を限界まで張り、その声にも明るさを持たせた。

「わたしは信じているのよ、レム。きっと、この閉鎖されたときの輪を断ち切ってくれる生き物が現れるって、ね」

「どうして、そう言い切れるの？」との問いかけには、答えられなかった。これは単に、悲惨なまでの状況下で気が狂わないよう、自己保身しているだけかもしれない。

けれどヴィラーネは彼を精いっぱい元気づけるよう、「きっと……、ね」と言葉を繰り返した。そう、自分は「想い」をしかとメッセージに織り交ぜているのだから……。

同じとき、日本にある街中の一軒家に、快活な声が響く。

お決まりのシャツと青いネクタイ、そしてラフな黒ズボンをはきこんだ西岡ドリムは朝一番から、若干の興奮を覚えていた。部屋のかたわらにある

ノートPCが、スパムメールであつても騙されてみたい一文を表示していたからだ。

「求む！ ドラゴン・ライダー」

彼は「夢」との意味合いでドリムと名づけられ、小学校ではさんざん名前をからかわれたが文字どおり、夢多き青年となっていた。そんなドリムが刈りこんだ髪をかきあげながら、メールの本文へ目を向ける。

内容はタイトルと似通っていたものの、どこか、そう痛切な想いがくみとれた。(とても奇妙な感覚だな……)

そのままドリムは、肝心の発信者名を調べていく。差出人はイザナギ・コーポレーションとなっており、さっそくドリムが検索をかけてみると、その会社は実在し、電車で移動可能なところに位置していた。

「また、あれこれ想像しているだけじゃダメだ。

行ってみるしかない！」と意思をこめるようにつぶやき、狭い自室を後にした。ごきげんさんで玄関を後にし、マウンテンバイクに跨る彼の頭には現在、多発している青少年の連続失踪事件のことなど、微塵もうかんでいない。

ドリムはプリントアウトした地図を片手に、電車を乗り継ぎ、専門学校ではなく彼の目的地へ到着していた。

木立の多いそこには白塗りのカベが真新しく、中規模クラスの研究施設らしい建物があった。その狭いガラス窓からは、わずかに光が漏れている。

ドリムが正面玄関に目をやると、すでに淡いブルーのワンピースがよく似合う、長髪の女性がおとずれており、警備員となにかを言い合っていた。(やはりあのメールはいたずらか、スパムだったのかな?)

ドリムも歩み寄り、警備員とスレンダーな彼女

との言い合いに加わった。警備員と話したところ、ドリームにしてみても不審な点が多々、見受けられる内容だった。

この会社は確実に、なにかを隠しているに違いない――。

そんな姿を二階の窓越しに眺める中年男性がいた。

かなり体格のいい男性は、この会社の社長ことイザナギ当人だった。シックな背広着のイザナギは、野太い声で大型機器を操作する研究員へ問いかける。

「ふふ、ドラゴンの子供に人気が高いからな。案の定、だ。今度はシンクロできそうかね？」

「それはまだ……。若い人間が持つピュアな意識を、存分に高ぶらせて実験せねばなりません」

「ピュアな意識か。ほとほと厄介な代物だ」とイ

ザナギは、ため息まじりに首を振った。

わが社が依頼された粒子加速器の高出力実験で突然、不可思議な「異世界」が確認されて一年あまり。それから独自に研究を進め、集積化された半導体などが引き起こす「トンネル効果」がキーであるとわかった。

これは、電子のたぐいが様々な障壁を通過してしまう、おもしろい現象であり、さらに電子が生まれる場所についても現代科学では未解明だ。

よもや異世界からの電子を受信し、往来可能にできるとは考えてもみなかった。しかし電子より大きい物質の往来を……。つまりは「ミクロのトンネル」を目に見えるレベルにまで拡大するには、量子力学と関連する「意識」の介在が必要となるのだ。

とりわけ強く異世界を「惹きつける」ピュアな意識が……。

現代科学とかかけ離れたテクノロジーを使う
試作装置は、相手からの情報ですでに構築してあ
る。必要なのは装置と反応する意識だけなのだ。

「これからが楽しみだな」

イナザギは無表情のまま窓辺から、奥に設置さ
れた監視モニターまで歩いていった。

「絶対なにかあるわ！」と声を荒げる彼女は、や
はりメールを見てすっ飛んできたという神崎リエ
子。となり街の学校に通う女子高生であった。

現在は近くのさてんで、ドリムとランチを共に
している。彼女もドリムと同様、朝食ぬきでやっ
てきたひとりだ。

ドリムはファンタジー関係の創作活動を行って
いるが、彼女はその受け手であり、そっち方面の
知識は豊富だった。自分と同じく、異世界の存在
を信じきっている。いや、ごく「普通」だと考え

ているようで、すぐに打ち解けられた。(でもこれ、
新手の出会い系サイトの勧誘とかじゃないよな…
…)

「あの、神崎さん？」とドリムは上目遣いに、パ
フェをほおばる彼女を見やった。

「リエ子でいいわ。あたしもドリム〜って呼ぶ
から。素敵な響きよね」

彼女は満面の笑みをうかべ、こちらを見つめ返
してきた。(これまでこの名前を、素敵なんて表現
したひと、いたかな？ もう勧誘されていいか
も！)

ふたりは腹ごしらえをしたのち、研究施設の裏
口から様子をうかがうことを決めていた。ドリム
が最後のひと口を終えると、楚々とした彼女はレ
シート片手に立ち上がった。

「作家さんはピンボーでしょう。その代わりな
にかあったら、あたしを守ってよ」と腰に手を当て

て、整った顔を近づけてくる。

こうしてふたりは、さてんを後に建物の裏口へ移動していった。しかし、そこは正面玄関と打って変わり、無防備な勝手口が風に揺らめいている状態だ。ドリムはリエ子……氏（出会ってそうそう、ファーストネームで呼び合えない！）に背を押される形で敷地へ侵入し、やはり半開き状態の通用口を眺めまわした。

「うす暗いけれど、人の気配はないな。入ってみよう」

小声で彼女を呼び、ふたりは背を丸めて通用口を通過していく。そのまま暗い通路を進むと、その歩みを阻むように、金属製の丸いハッチが現れた。堅固そうなハッチのかたわらには、IDカードを通す端末があるけれど、それ以外に開錠できそうなものはない。

自分たちのちょっとした冒険談も、ごく平凡に

終わるのかな。

そのとき、リエ子氏が歩み出てIDカードらしきものを、端末に通した。途端、にぶい電子音とともにロックが解除される。ドリムは目をみはってたずねかけた。

「リエ子さんは関係者……だったの？」と、やはり「勧誘」のことがドリムの頭をよぎり、メールを見たとき覚えた衝動的な気分に対し、自嘲した。どうも自分の頭は、夢見がちな小学生のときから、あまり変わっていないらしい。

「いいえ、警備員さんから失敬したのよ」

彼女は微笑みながら、したたかに告げた。一本とられたなと思いつつ、ドリムは開かれたハッチの向こう側を目で探った。

そこはかなりの大部屋であったが、やはり電灯などはついておらず、人の気配も感じられない。

ドリムは率先してふみこみ、彼女を手招きした。

やがて暗さに慣れてきたドリムの目が捉えたものは、大小様々な電子機器とそれらの中央に位置する、半透明の円柱だった。さながら氷の塔とも呼べそうな円柱は紫色の光彩を放ち、独特なオーラを漂わせている。

「なにか、こう、あの円柱に呼ばれている気がするな」とドリムはささやく。対してリエ子氏もわずき「あたしも同じ」と応じてきた。ふたりでそろそろと円柱に近寄った矢先、円柱が七色の光を猛烈に放った。と同時に周囲の電子機器が目まぐるしくLEDを点滅させ、男性の張りつめた声が響きわたる。

「シ、シンクロしました！ 成功です。イザナギ社長！」

「ごくろう。データの収集をつづけたまえ」とつさにドリムは単純なワナにはまったことを察したが、もう手遅れだった。

天井に備えつけの電灯が強烈に辺りを照らし、ふたりを取り囲むよう、警備員たちが駆け寄ってきたのだ。唯一の脱出路だったハッチも、機械音を発して抜かりなく閉じた。

そして金属製の階段からは音を立てて、大柄な男性が降りてくる。単にこちらを不法侵入でつかまえる気なら、警備員にまかせておけばいいだけのこと。イザナギと呼ばれた社長らしき人物、自らが「お出迎え」するのはおかしいし、なにより研究者と思しき白衣の面々も次々に現れているのだ。

ドリムは後ろ手で彼女を隠すように守り、男性と真正面から向き合った。

「シンクロだと？ なにを企んでいる！」と大声を張った。だが相手に動じるそぶりは見られない。ドリムはすでに、警備員に正面からはがいじめにされている。

